



チェコの切手 メノー（層の直角断面）

1968年東欧夏の旅

～チェコ動乱と国際地質学会～

中村久由

出発まで

長い人生の旅路で われわれはしばしば突発的な事件や事故にみまわれることがある。それが偶然であればあるほど決定的瞬間とかアクシデントあるいはハプニングといわれるものの材料を提供することになるのだろうが 筆者の体験も正しくそれに価するものであった。その体験というのはこれから述べようとするチェコ動乱のことにほかならないが 始めからプラハ行きが決っていた訳ではないところに いっそう偶然性が感じられるのである。

1968年8月19日から27日まで チェコスロバキア的首都プラハで第23回国際地質学会が開催されるという知らせがあり 地質調査所から佐藤所長と鉱床部の関根金属課長が出席する手筈になっていたのであるが たまたまその頃テヘランで開かれるE C A F Eの会議の日程との調整がむずかしくなり 佐藤所長も関根課長もプラハの学会に出席できないことが判ったのは5月の末であった。今度の学会には チェコスロバキアという非火山地帯の国の会場には珍しく温泉の成因に関するシンポジウムが組まれていたので 筆者もできれば出席したいという希望をもっていたが とくにそのような意思表示をしていなかったので まずとても行けそうにもないという気持でいたのである。

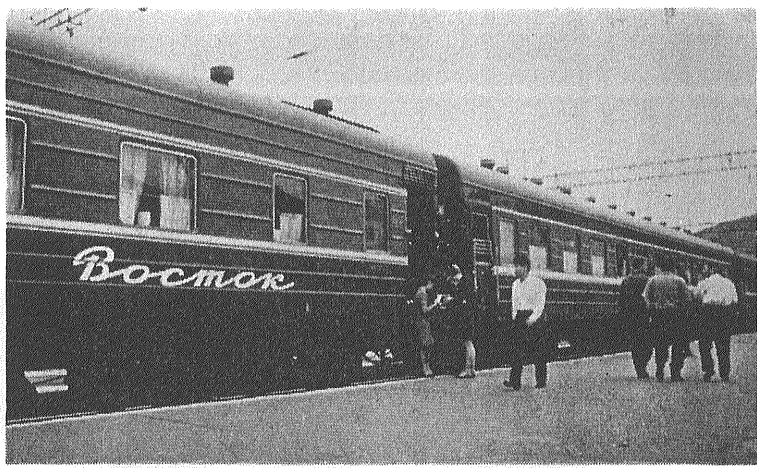
ところがこれまた何という幸運か 討論の2日目の座

長をやって欲しいという学会からの手紙をうけとり 所長に相談したところ 前に書いたような事情もこれありここに降って湧いたように学会出席のチャンスが訪れた訳である。

それから慌しく学会出席の準備にとりかかったのであるが 折角チェコまで行くのであればそのついでにイタリアのラルデレロも一目見ておきたい また欧州まで南廻りの飛行機で往復するより 片道だけはシベリア横断のモスクワ経由で行った方が旅行も面白いだろうし 旅費も安上りになるという一石二鳥の効果を狙い 旅行のスケジュールも 横浜—ナホトカー—ハロウスク—モスクワ—プラハ—ローマ（ラルデレロ）—羽田 という東欧から西欧にかけてほぼ一廻りということにし 8月10日の風の強い午前 横浜からナホトカ向けの客船ハロウスク号の人となったのである。

横浜—ナホトカの旅

紙面の都合で詳しいことには触れないが ソ連の国内旅行にはインツォリスト (Intourist) チェコ国内ではチェドク (Čedok) といういわば国営の交通公社の手を経なければ旅行できない仕組みになっているので 出発前に船 列車 飛行機 モスクワのホテルなど一切の予約



ナホトカー—ハロウスク間を走る急行ボストーク号 入口で説明しているのは係りの女の子で日本の列車ボーイに当る 左側1等車 右側2等車（ナホトカにて）

モスクワのウクライナホテル

をとっておかなければ ビザも下りないところにソ連圏内の旅行についての特色がある。いかえると 一步旅行に踏み出すと すべてインツーリストの指図によって行動しなければならぬということである。このため旅行社から予めその旅行に必要な切符 食券 ホテルの滞在券 観光券をうけとる訳だが それがまた旅行上の注意書を一度くらい読んでも判らないくらいにややこしい。やっとのことで ハバロフスク号に乗り込み正11時 船は横浜港を出航。東京湾を出るまでは快適そのものだったが お昼すぎ大吠岬を廻り外洋に出たとたんに大揺れに揺れ出す。このハバロフスク号は排水量5,500トン 定員300名のスマートな客船で 海の穏かな時は乗り心地満点と云ってよいが 生憎この日は 台風何号かが伊豆半島に接近 上陸するかもしれないという警報がでていた位であるから すでに横浜をたつ時風はうなり 横ぶりの雨というすさまじい天気模様 荒れなければよいがと念じていたのが とうとう適中する仕末になったのである。この時は 津軽海峡を横切って日本海に入るまで続いたのであるから相当ついていない船旅だったということになる。

それでも日本海に入ってから波もおさまり それまで船室に引込んでいた客も食堂や甲板に姿をみせ さすが国際色豊かな雰囲気をかもし出すようになったのであるが 船の人の話では大体日本人が60~70%を占める由。とくに8月は 夏季休暇を利用してバイカル湖やミンスクへ旅行する学生が多いということであった。

横浜—ナホトカの所要時間は52時間であるから2晩は船内に泊ることになる。10日の晩は海が荒れて何の催しものもなかったが 11日は夕食前に映画の上映 そして夜はロビーで楽団演奏というサービスつきである。演奏する曲目はモダンジャズが多く それに合わせてダ

ンスもとび出し 意外に派手ななり行きに一驚する。それに船内にはバーもあり つれづれなる一時の間をもたせてくれる。

この航路でナホトカに行く客は できるだけ金をかけずにソ連国内を旅行しようという学生の他 大半はモスクワ経由で東欧や北欧に行く人が多い。船室ではたまたま1ヵ月の休暇をもらって日本に帰り 再びソ連に帰国するという人に会ったのであるが この人はソ連で終戦を迎えそのまま現地に居つき現在籍も向こうにあるが 鉄工場に長いこと勤める内に両親の居所が判ったので 随分前から休暇願を出していたところ漸く1ヵ月の休暇が出たので 20数年振りに日本へ帰って いまその帰り道とのこと。

20年向こうにいるのでさぞ筋金入りの人かと思ったが どうも止むを得ず現地に留まることになったらしく 常に望郷の念をかこっていたことが話の節々からもうかがわれる。念願叶って両親や兄弟姉妹に会うことができ その嬉しさでこの1ヵ月は夢のように過ぎ去ったに違いない。話ではあと2 3年もすればその後の生活は保障されているそうだが 今度の帰国でそのうち奥さんを連れて日本に戻る決心が固ったとのこと。子供達は反対であるが もう大きくなった上に奥さんは一緒に行ってもよいというので 自分達だけでも日本に是非帰りたいと涙を流して話しているのを見て ここでも戦争の古傷に触れた思いをすると同時に 自分の生れた国がそんなによいものかと思ひ知らされた一幕もあった。日本からの土産物は旅行カバン一杯ほとんど衣類ばかり。Yシャツ一枚が日本円で3,000円以上もするという話をきけばその理由ももうなずけるのだがたまたま噂以上にソ連では消費物資の値段が高いことを知りうる機会にもなった訳である。



モスクワの近代的な建物を擁するアルパート通り 写真の建物は アパートで その下に各種の商店 レストランなどがある



モスクワ大学の遠景 いろいろどりの花畠が実に美しく モスクワが一目で見たせる高台の上にこの大学がある

8月12日昼すぎ 白っぽい多分花崗岩と思しき陸地が姿をあらわし 船内は一段と活気をおびる。午後4時長い船旅を終えてナホトカ入港。下船前に税関の調べがあって上陸後港の待合所からバスで駅のプラットフォームへ。ここが果てしなく欧州へ続く大陸の一部かという気持と 初めて足を踏み入れた社会主義国家に対する好奇心とが手伝ってものみな珍しくみえる。印象的であったことは ならかな丘にアパートがたち並び道路が実にきれいに清掃されていることである。駅の近くでは多分仕事を終えた人達であろう 数人づつグループになって悠々と腰を下し 煙草をくゆらせながらわれわれ外国人をじっとみつめている。この悠々たる感じは国柄 人柄からくるものであろうが 毎日を慌しく過しているわれわれにとって いささか気抜けした感じがない訳でもない。

夕方7時15分列車は一路ハバロウスクへ。この間約15時間半かかり夜行になるので 列車は一等寝台車にする。一等車は2人一部屋のコンパートメントで オーストラリアからきたお爺さんと同室になる。この人は船と汽車を利用しての世界一周中とかで これからモスクワ ロンドンを経てケープタウンに行きそこからオーストラリアに帰るそうだが 本職は大工さんとか。一緒に食事をしてベッドに入る。くら闇で外の景色はよく判らないが 今中ソ国境問題で紛争をおこしているウスリー河に沿って一路北上する。寝台車はスプリングが固くあまり寝心地はよくない。翌13日 目を覚ますと快晴 列車はシベリアの広野をひた走り走るが ちょうど真夏なので野原も緑 陰さんな感じは少しもない。車中からの撮影は厳禁されているのでこの風景をカメラに収められないのが残念である。予定通り10時40分ハバロウスク着。ここで モスクワ方面は飛行機 バイ

カル湖方面は列車とコースは分かれる。昼食をレストランでとりバスで空港へ。ここも明るく綺麗な街だ。ただ空港へ行ってから飛行機に乗るまでの手続きがうまきさばけずかなり時間がかかる。このあたり他の国際線と違ってサービスがかなり悪い。午後3時15分TU104型のターボプロップジェット機でモスクワへ。この飛行機はモスクワから羽田へ乗入れているのと同じタイプのもので2枚羽根のプロペラが各々反対に回転する双発の脚の高い型の旅客機であるが 室内での音がうるさいこと 振動が激しいこと 気密がよくないので上昇下降時の不快感が強いことなどの欠点があり乗心地はあまりよくない。しかし 天気がよかったので空からみる景色の移り変わりをタンノウできたのは幸いであった。モスクワまでの飛行時間は約9時間 夕方5時15分無事モスクワのドモエドボ空港に到着。ここからバスで予約していたホテルメトロポールへ。50分走って午後6時半 横浜出港以来3日目でモスクワに到着。

モスクワでの一日

ホテルのインツォーリスト係で部屋の番号を聞いたり翌日の市内観光の集合時間を問い合せたりして 荷物をうけとるため玄関まで下りて行くと はからずも地質部の平山次郎君とバッタリ出くわす。

実は出発の前 モスクワに立寄る予定だったので モスクワ大学に留学中の平山君にもぜひ会いたいと思ひ手紙を出したところ 万事手筈を整えて空港に迎えに来てくれるという返事をうけていたのだが 空港では姿が見えないので多分用事ができてこれなかったのだらうと思っていた矢先だった訳である。彼の話によれば空港まで行ってくれたそうであるが飛行機の到着時間が少し早目になり われわれのホテル到着が先になったという時間の食い違いであったらしい。ともかく異郷の地で同



赤の広場にて 上天気の日で見物人が非常に多かった。右側にみえる長い建物は国立百貨店で グムと呼ばれている



赤の広場にある St. Basie 寺院

胞に会えることくらい嬉しく 心強いことはない。早速アレコレ話の花を咲かす。一緒にきてくれた Miss Alla は彼の語学の先生とか ミニスカートを身につけたモダンな女性で社会主義国家の娘のようにみえない。ホテルのレストランでロシア料理を味わいながら楽しい一時を過ごしたのであるが Miss Alla のいうことは全部平山君が通訳してくれるとはいえ 少しでもロシア語が判ったらさらに楽しめただろうとロシア語を勉強していないことを悔んでも今さら始まらない。話の種はつきないが 明日の再会を約してその日は別れる。

翌14日 10時からインツォリスト差向けのバスによって市内遊覧 幸い天気は上々で汗ばむほどである。バスには日本人11人が一団となって乗り ハバロウスク大学の日本語科の若い学生がガイドを務める。もちろん短時間で市内見物であるから名所旧蹟が主であるがモスクワ大学 赤の広場 ウクライナホテルなどの落ち着いたしかもその歴史からにじみでる雰囲気は流石見る者に感銘を与えずにはいない。赤の広場など外国人だけでなく国内の見物人で埋まり レーニン廟に詣でる人が延々長蛇の列を作っているのも社会主義の国らしい風情である。筆者は住宅に困っていたせいかな やたらと立派な高層のアパートが目につくが 説明によると人数に応じて1人9平方メートル当りの間取りをもつアパートが格安で借りられるとか。この辺は実にうらやましい話であった。

午後 平山君と Miss Alla の案内で科学アカデミーの深部構造地質部地熱研究室を訪問する。ここには前もって平山君から地熱の話をかきかせてくれるよう頼んでおいたのであるが 主任の Makarenko がすでにプラハにでかけ Polak という若い地球物理の人が待っていてくれて ソ連国内の地質構造と熱流量との関係を説明し

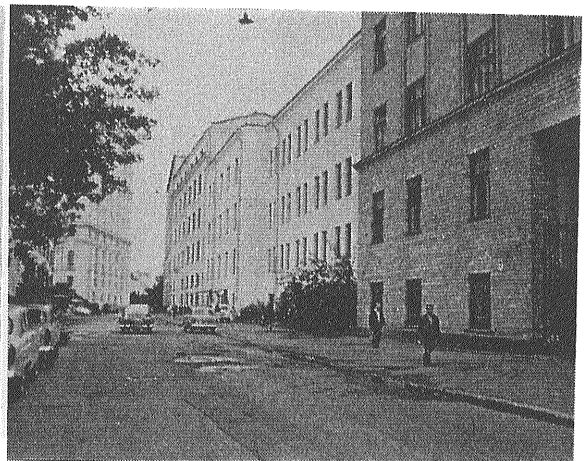
てくれたが ソ連ではこの方面にかなり力を入れて研究しているようであり 興味深い話であった。なおカムチャッカで5,000kWの地熱発電を行なっているがこれは全く試験的なものでとくに大規模な発電を目的とするものではない由。また千島で最近火山の調査のためボーリングを行なったが成功しなかったということであるからおそらく温泉なり噴気が得られなかったのであろう。

夕刻 三菱商事の方案内で ホテル北京のレストランで食事をする機会を得たが ここはバンドつきのいわゆるレストランシアターという感じの場所である。おそらく大部分は国内の人であろうが 予約でなければ席がないほどの混みよう。女の人はきれいに着飾り“男と女”“黒いオルフェ”などの演奏に合わせてダンスを踊るさまをみると ここがモスクワかと疑われるほどである。詳しいことは判らないが この辺までが自由化の限度であるのかもしれない。Miss Alla は夜のレーニン通りを案内するといつて途中まで車で足を延ばしたのであるが 時間もおそくなった上に筆者の出発が明朝早いので 名残りは惜しいが思い出深いモスクワの一日もここで別れをつけることにする。平山君は科学技術庁の許可がおりず プラハの学会に出席できないとのことであったが 近く帰国するので 次は日本で語り合おうということで別れる。

このように 筆者のモスクワ滞在は2晩 実質的にはまる1日という短いものであったため その国柄のいろいろなおことはほとんど知る機会がなかったが 平山君からは いろいろ面白い話を随分聞かせてもらった。いずれ平山君も本誌に筆をとることになるだろうから ソ連に関する詳しい話は 平山君の報告を楽しみに待つこ



赤の広場 左側はクレムリン その前にレーニン廟があり お参りする人が長い列を作っている



モスクワの農業アカデミーの土壌研究所(手前右)と 科学アカデミーの地質学研究所(奥右の白い建物) これらの研究所は モスクワの市内にあるが 閑静な場所を占めている

とにしたい。

プラハの町

8月15日 午前6時20分きっかりにインツーリスト差回しのタクシーが迎えにくる。霧の中を空港まで50分走り9時プラハ行きの飛行機に搭乗。税関ではこわい小母さんが所持金を検査する。社会主義の国では何処でも同じだが自国の金の持出しは非常に厳しい。入国時に比べ出国時にホンの僅かでも所持金が増えたりしていると全部没収される由。

ジェット機で快晴の空を一飛び2時間20分でプラハ飛行場につく。困ったことに飛行場についてその先どう行ってよいのか全然判らない。学会の案内も出るはずだがまだ日が早いので案内の人はおろか掲示も出ていない。仕方がないのでCSAのバスでエアターミナルへ行く。

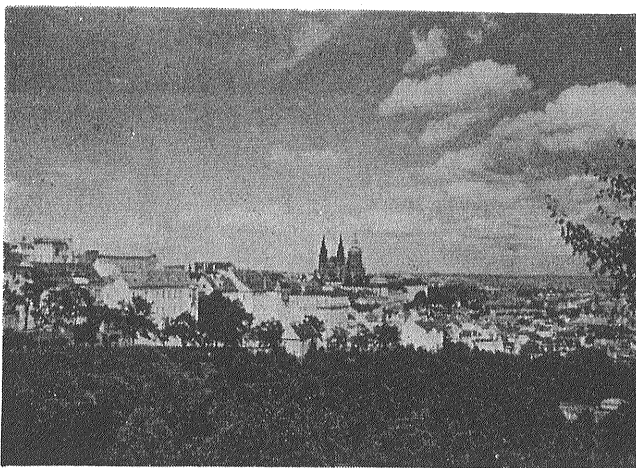
学会参加の申し込みが早ければホテルに予約できたのであるが前にも書いたようにギリギリに申し込んだので宿はStudent Hostelつまり学生の寄宿舎しかないという。それはよいとして肝心のStudent Hostelの場所が全く見当がつかず弱っていたところ幸い若い学生がタクシーを拾ってくれて漸くたどりつくことができともかく肩の重荷をおろす。このように困ったのも先ず言葉が通じないことに理由がある。ここは第2外国語としてドイツ語 ロシア語そしてフランス語で英語を使っても学生以外ほとんど通じない。店に出ている看板も全部自国語で外国語が全くみられないところなど日本と全く対照的であった。

Student Hostelは町の中心から電車で約30分かかるがついた日は食堂でビルゼンビールなど試飲して腹ごしらへをし状況視察に町へ出かける。モスクワでは全然看板が外に出ていないのでどこが店なのか全く見当が

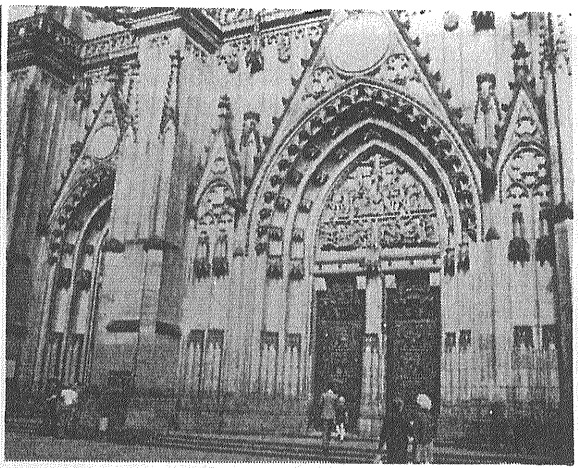


科学アカデミーの地質学研究所入口での記念撮影(平山技官写す)
右: Miss Alar
中央: Mr. Polak
左: 筆者

つかなかったがプラハまでくると個人経営の店が多くショーウインドウにいろいろな品物が飾られている。夜の町は明るく行きかう人でかなりの賑わいだが女の人は洋服や宝石 男の人はカメラ(東独製のものが多)の前に立どまっているのが多くみうけられた。町角で人が集っているので覗いてみるとギターをもった若者が2-3人 幾分控え目ながら当世風の唄を歌っているには驚く。そういえば男の子ばかりでなく女の子も混った長髪 ヒゲ サイケ調の連中がグループに分れて町のアチコチに屯ろしているのがみえる。町の雰囲気は明るく確かに自由化を歌歌しているように感じられるがまさかその後数日をたたずして苦悩のどん底に叩きこまれるとは……。しかし通りに面した広場には数人の人が集って何やら議論しているがそれは自由化の問題かそれともプラステラパにおけるチェコ 東欧5ヶ国首脳会議の内容か 筆者には全く理解できなかったがこのように自由化の波に浸りながら何かしら一抹の不安がつかまどっているかのように思われる感がない訳では



プラハの遠景 中央の高い塔はテン教会の古い尖塔



プラハ城の正面

なかった。

プラハ到着が8月15日 学会は19日から始まるのでこの間3 4日暇がある。その前にできるだけプラハ町をみておこうと思い 学会の始まる前日の18日 日曜日でもあったので遊覧バスで市内見物を試みる。今になって考えると 学会の前2日でも3日でも予猶があったからこそあの美しいプラハの町 名所旧跡をみる事ができたのであって 慌しく学会の始まる頃かけこんだのであったら 多分何もみずに帰ることになったに違いない。何が幸いするか全く判らぬものである。

さてプラハについてであるが ここは百塔のプラハとも黄金のプラハとも呼ばれる人口100万の都市で市街を彩る緑地帯と中世から現代に至る多くの様式の建築物とによってヨーロッパでも最も美しい都市の1つといわれているところである。市内を貫くブルタバ(モルダウ)川には13の橋がかげられその中でとくにカール橋が有名であるが 左岸には1000年の歴史をもつプラハ城がありその南のマラー・ストラナには歴史上の記念物が多く日本大使館や地質調査所もここにある。市内には多数の小 中学校のほか 1348年創立の有名なプラハ大学 高等技術学校(1717) 工芸専門学校(1885) 造形美術アカデミー(1779)があり 第2次世界大戦後には農業専門学校 ロシア語学校などが新設された。またチェコスロバキア科学アカデミーなどの学術機関 多数の劇場 博物館 美術館 図書館がある。

丘の上にたつて町を一望すると中世から残るこれら建物がモルダウ川に沿って並び 色彩豊かな塔がこの町を1つの大伽藍のようにみせる。とりわけテン教会の古い尖塔がきわだって高く 夕刻波静かなモルダウ川の河面に映るこれらの塔は 中世のおもかげをそのまま残す

一幅の絵画のように美しくきわめて印象深いものがあった。

国際学会の前後

今度の国際地質学会は プラハの中心から北西によつた Technical University で開催されることになっていたので ついた翌日つまり16日 早々 Registration のため会場に行ってみる。まだ参加の人の姿もまばらで会場係りは準備に追われていたが初め係りの人は大学の職員かと思つていたところ すべて地質学会の会員であることが判り大いに驚く。というのは 一部を除き Registration から始まり 宿舎係り 資料配布係 資料販売係等数人からなる係の大半は女の人で それがみな地質屋であるから 日本に比べ遙かに国土の狭いチェコでありながらこんなに女の地質屋が多いということを初めて知つたからである。話によるとチェコの地質屋は56km²に1人の割になるという。この国の面積はわが国の北海道と九州を合せたよりわずかに広い127,800km²であるから この面積から割り出すとその数は2,300人ほどになる。この勘定で行くと わが国ではほぼこの3倍すなわち7,000人くらいになる訳だが 実際にはわが国の地質屋の数はこんなに多くないであろう。数の上だけで判断できないにしろ 少なくとも日本より 国土の保全 地下資源の開発に力を注いでいることは確かなようである。参加者名簿からその数を拾ってみると会場がチェコ本国ということにもよるが 790人でチェコが最も多く アメリカが440人でこれに次ぎ あとソ連295人 フランス250人 カナダ155人 イギリス135人 イタリア88人 ポーランド81人という順で続く。このように数の多少はあつてもほとんど世界各国から代表が集つているようにみえた。それにしても日本から23人というのは決して多い方ではない。特にわが国唯



プラハ城内にある大統領官邸(自動車の前並んでいる左側の白い建物) スボボダ大統領がしばしばバルコニーにたつて群衆に呼びかけをした場所である



ユダヤ人の墓 プラハにはヨーロッパで一番古いユダヤ人の教会がある説明しているガイドのおばさんは 英語 フランス語を立板に水のごとく話す

一の地質に関する研究機関といわれる地質調査所から筆者1人というのは余りにも淋しく 種々の小委員会との関連からいっても2人以上の参加はぜひ必要である。日本では国際学会の参加に国費を出すことが非常にきびしいので結果的にこのような仕末になったのであるがアメリカ ソ連始め先進国といわれる国々から圧倒的に多数の参加者が出席しているのをみるにつけ もう少し何とかならないものかと思うのは筆者1人だけではあるまい。

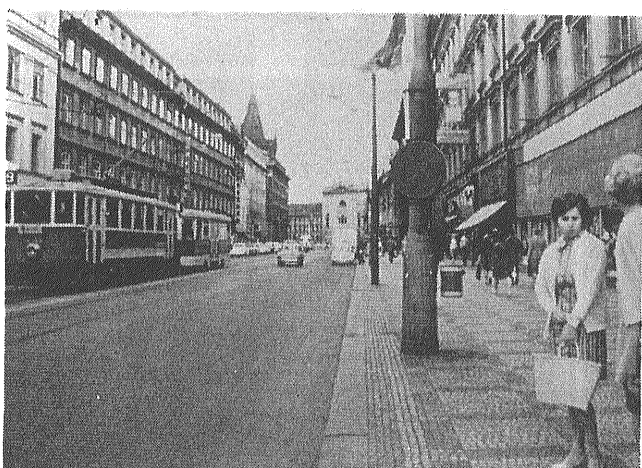
日が迫るにつれ 町にもネームプレートをつけた会員の顔がふえ 19日総会が行われる頃には日本からの参加者の姿もみられるようになった。19日の総会は Technical University から少し離れた文化公園内の建物で行なわれたが さすが芸術の国だけあって開会に先立ちチェコフィル交響楽団によるスメタナの「モルダウ」が演奏され 次いで 開会宣言そして種々の議題が提案される。この日は総会だけで解散となり 20日から各々の会場に分れて個人講演 シンポジウム 委員会 分科会が開かれる。筆者が最も関心をもっていた温泉の成因に関するシンポジウムは20日 21日 24日 26日の4日間あるのでこれに出席し それ以外の日は鉱床地質図や構造地質図の小委員会に出席するつもりでいたが 4日間は出席できないため東大立見辰雄教授 大阪市大市川浩一郎教授に前記4日間の議事内容のことを後でかかせてくださるようお願いする。25日は日曜日で学会も休みになるので この日は カルロビ・パリ (カルルスバード) 温泉に行く予定にし 25日の水理地質のエキスカーションにも参加するつもりでいたのであるが 全部ご破算になってしまいこの報告におりこむことができないのはきわめて残念でならない。

20日は朝9時からシンポジウムが開かれる。午前中は

個人講演 午後アフリカ オーストラリア 南北アメリカの温泉に関する総括的な報告とその討議がなされる。報告者はチェコの地質調査所の Kačura と Dovolil の2人で その報告について種々意見を出すという形式である。この午後の討論会の議長に筆者が割当てられたのであるが 意外なことに英語 フランス語のチャンピオンのやりとりで大いに面喰う。前に書いたようにここは第2外国語としてドイツ語 ロシア語が使われているのであるが 集った人が東欧からきた人が多いせいか英語を話す人が少なくそれに意識してかあるいは無意識か判らないが ドイツ語 ロシア語の発言は少なく 専らフランス語を使うので フランス語を知らない筆者は困り果てたのであるが幸いフランス語の方はもう1人の議長 Djellouli (Tunisia) がやってくれたので大いに助かる。翌21日はアジア ヨーロッパの温泉についてさらに討論し 個人講演として塩分の多い温泉に関する問題など発表されることになっており 大いに興味を覚えたのであるがこれらもまた全部打切になってしまった訳である。とにかく 不十分にしろ20日の議長の役割を果たし ホットした思いで早速ビルゼンビールを飲み気分をほごす。

この国ではボヘミアの硝子細工と並んでビルゼンで作られるビールも有名であるが 確かに日本のビールより味が濃厚で非常においしい。但し 少し多く飲むといささかしつこい感じでそうたくさんは飲めない。レストランに入ると黙っていてもビールをもって来る位 日常の飲物になっており 人によっては朝からたしなんので 明るい中からビールを飲んでもそう罪悪感を覚えない。

さて20日も過ぎ21日朝早くホテルで今まで余り聞いた



ブラハ市内の小公園で討論する群衆 動乱の数日前の夕方



ブラハの中心街 動乱の数日前に写す

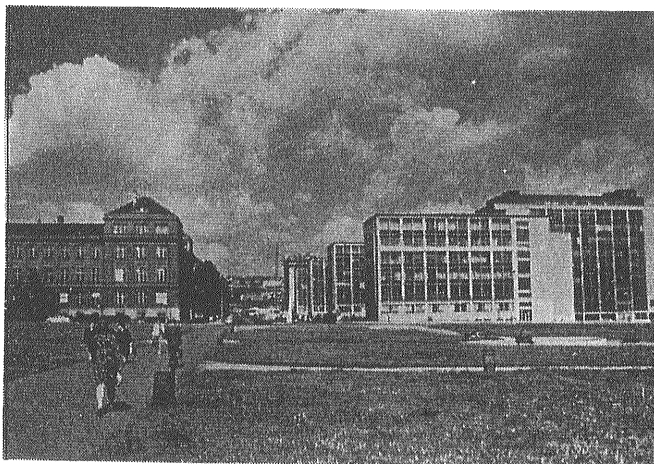
ことのないジェット機の大きな爆音で目を覚ます。前に書いたように プラハに到着当時は Student Hostel に泊っていたのであるが 場所が遠く不便なことも多いので町のホテルに移りたいと思っていた矢先 大阪市大の市川浩一郎教授がホテルを引越したという話をきいたので宿舎係に話をつけ 市川先生のあとに移ることになり19日夜から Hotel Zlata Husa に宿泊していたのである。この Hotel は国立博物館のあるバスラフスカ通りに面しており プラハのいわば中心地に位置するという便利な場所にある。この Zlata Husa には名古屋大の渡辺武男教授 東大の立見辰雄教授が泊っておられ 筆者は山形大の皆川信弥教授の部屋に入れさせてもらったのであるが 動乱に直面してあの不便な Student Hostel に泊っていたらどんなに苦勞したか判らないと思うと この Hotel に移ったことは全く幸運であったと言ってよい。

さて洗面をすまし Hotel の食堂に降りて行くとすでに食卓についておられた渡辺 立見先生が西独からのラジオのニュースで「昨夜11時 東欧5ヵ国の軍隊がチェコに侵入したと放送している」と教えてくれる。そういえば 通りに面したガラス越しに興奮した人々が駆足で行きまわっているのが見える。そのうち タンク 装甲車がものものしい音をたて何台も通り そのつど群衆が口笛を鳴らし何やら叫んでいる。通りに出てみると昨夜まで静かだった町の様子は一変し騒然としている。ここにきた当時 家という家から国旗が出されているのが目についたのであるが 気がつくや国旗は 全部おろされ 中には半旗を掲げているところもある。窓には USSR go home とかチェコ語 ロシア語で書かれたビラ それにスポボダ大統領 ドブチェク第一書記の写真

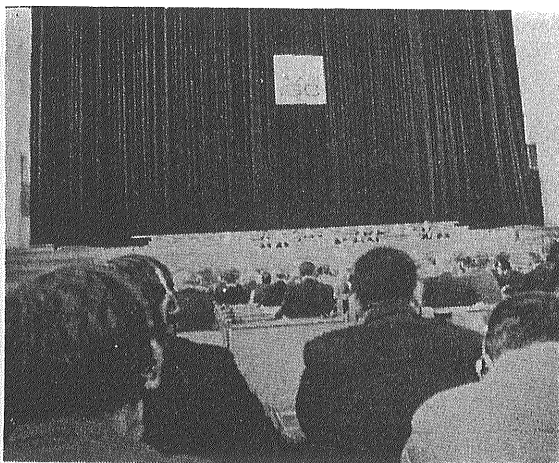
が貼り出され 非難の声が町々に溢れているような感じである。時に小銃の音が聞えてくる。特に21日夜10時半すぎ国立博物館の方向で数分間機銃の音が鳴り響き 曳光弾が20度くらいの角度で くらやみを切って飛ぶのがみえるほどであった。

町の交通機関は全部ストップし 不気味で町を歩くこともできない。そのうち外国人はできるだけ早く国外に退去するよという話も伝わってくる。学会も自然流会というニュースも入り 渡辺 皆川先生は日本大使館へ連絡のため危険をおかして出かける。日本大使館はここから徒歩20分位 プルタパ川の向こう岸にある。帰ってきての話では 情報不明であるが23日にバスを出すよう目下交渉中とのこと。日本から学会に参加した諸先生はホテルに分宿しているので連絡のため渡辺 立見先生再び出かける。

この Zlata Husa には他の国の人も泊っているが みな不安げな面持ちでグループを作り話し合っている。たまたま食堂で知り合った人の中にポーランドからきた水理地質専門の夫婦がいたが 動乱後ホテルの一室に閉じこもったきり食事以外顔をみせず 会っても固い表情を崩さない。ここでも切角学問を通じて芽ばえた友情が動乱によってたちきられたという不幸な一面を示している。反面 チェコの人にはわれわれ日本人にはきわめて好意的で 街角に立っているやわざわざ向うから寄ってきて状況を説明してくれるほどであった。気の毒なのは年老いた婦人で 目に一杯涙を浮かべ 肩ごしに一変した街の様子を眺めているのには同情を禁じ得ないが おそらく心中 かつて味わった占領の悲惨さをまた繰り返すのかという悲しみに溢れていたのであろう。



国際地質学会の会場となった Technical University (右側の建物)



22日は町の空気もかなり冷静になったが その頃から街行く人が喪章をつけたポータブルラジオを耳から離さない。 きくところによると放送局がアチコチにあってそこから非公式にニュースが流されているとのことである。

学会の方もいよいよ流会ときまり 車を運転してやってきた人達は早くプラハから脱出しはじめる。

渡辺先生が日本大使館と交渉した結果 23日午後3時 Āedok のバスで出発できるよう手配がつく。 23日街を占領した東欧軍の囲みを通り参々伍々 学会参加者が日本大使館に集合。 午後3時 学会参加者23名 三井物産の駐在員8名 その他一般人5名計36名をのせたバスと堀越さんの運転する乗用者がプラハを離れ ビルゼンを通り一路西独の国境へ向かう。 途中 森の中で戦車がずらり銃口を道路に向けひそんでいるのがみえる。 あまりいい気持でない。

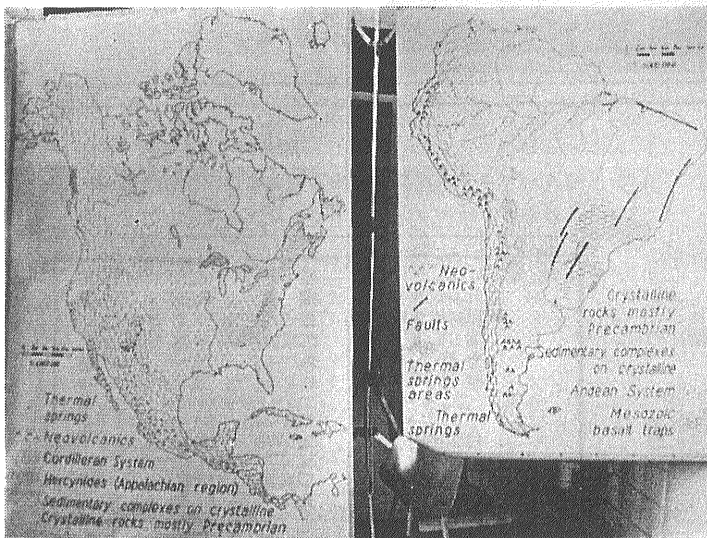
写真の撮影もうるさくなり このスリリングな場面を記念にとっておくことも断念せざるを得ない。 午後6時半無事国境の関門に到着。 バスはここまでであるが税関の人や運転手の好意で西独側の関門までバスを乗入れてくれる。 この頃には日も暮れ おまけにかなり激しく雨が降り出す。 チェコの関門から西独の関門まで200m 位あるが この間を重い荷物を持ち 雨の中を歩くとなると大変な苦勞である。 幸い歩かずに済んだので大いに助かる。 ドイツ語の得意な北大湊正雄教授が税関の人にかかけあってバスを廻してくれるよう申入れしたところ やがて体格のよいおばさんが運転するルフトハンザのバスがきてくれる。 荷物を積みかえ 午後8

時互いに無事脱出したことを喜びながらニュールンベルグへ向かう。 立見先生 市川先生と堀越さんがニュールンベルグでのホテルの手配のため乗用車で先発する。 午後10時半 ネオンの美しい戦争裁判の町へ到着。 ここでホテル3軒に分宿し 同じホテルに泊った皆川先生とレストランで夕食をとったのはすでに12時近くであった。

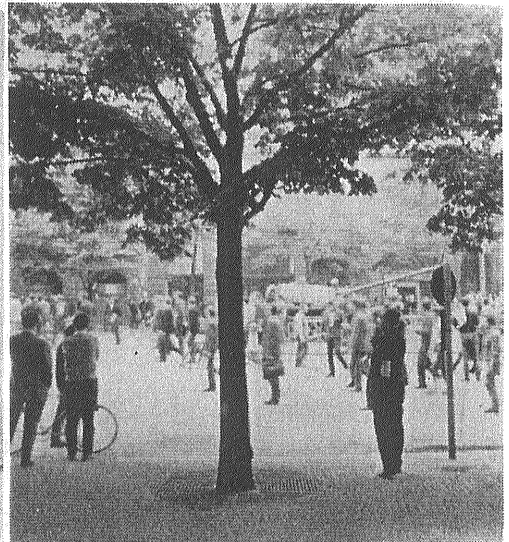
全く思いがけずチェコ動乱を体験した今回の旅行のてんまつは以上述べた通りである。 この間、見聞した事柄は詳しく日本の新聞 週間紙に報道されているのであまり深く触れなかった。

確かにわれわれ外国人からみて 同盟軍の武力介入は何とも理解に苦しむところであったが チェコの人にとっては なおさらこのような仕打ちに耐えがたいものがあつたに違いない。 温泉のシンポジウムで世話になった地質調査所の Kačura や 女性の地質屋 Student Hostel の管理をしていた気の好いおばさんはその後どうしているだろうか。 4月18日の新聞によるとドブチェク第一書記もいよいよ辞任したと報じているが 多分もはや動乱以前の明るいプラハの町の空気を感じるとことはできないのではないだろうか。

思いがけず通過することになったニュールンベルグで2日ほど休息し あと予定通りフランクフルトからローマに出て ラルデレロを見学し 南廻りの飛行機に塔乗して31日羽田着 約3週間の旅は これで終わったのであるが 紙面もつきたので ラルデレロの見聞記はまたの機会にゆずることにする。 (筆者は 応用地質部長)



シンポジウムの会場で Mr. kačura が説明のために用いた温泉分布図



Hotel Zlta Husa の前を通る東欧軍の装甲車 21日朝写す